

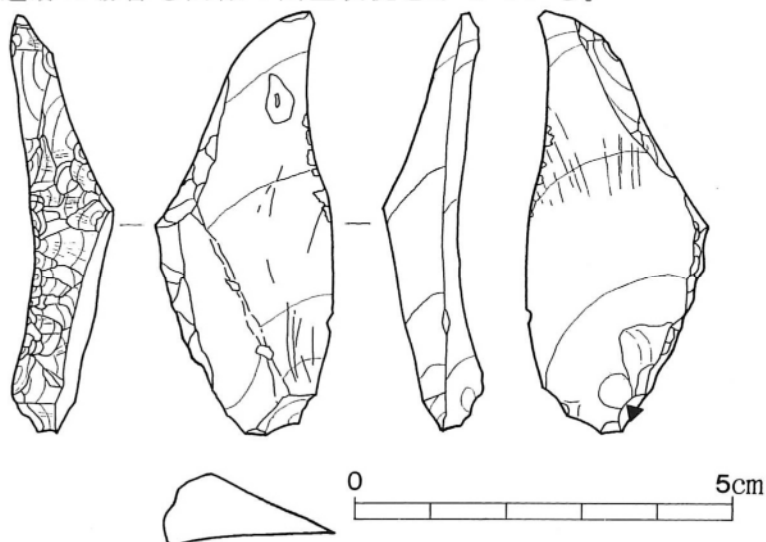
野垣好史

(埋蔵文化財センター学芸員)

1. 石器の概要

本資料は、今年度調査した開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の縄文時代中期中葉の竪穴住居内より混入品として出土したものである。射水丘陵周辺では古沢 A 遺跡や向野池遺跡のように製品が単独で出土する例が多く、本遺跡の場合も同様の出土状況を示している。

本資料の石材は濃飛流紋岩もしくは頁岩で、斜行する縦長剥片を素材としている。左側縁の先端部側を斜めに整形加工しており、素材の形状を大きく変えてしまっているものとみられる。一側縁のみを加工しており、加工は腹面側からが主であるが、厚みがある部分では背面側からも行っている。打面は狭小で、調整を行わずに原石の分割面を打面にしているものと考えられ



る。打面からの剥片剥離角は 140 度である。背面主剥離面の剥離方向に関して、図では基部側からの剥離として表現しているが、これは必ずしも明確でなく、先端部側から行われている可能性もある。もし後者の場合には腹面の剥離とは方向を逆転させて打撃を加えていることになる。また、連続微小剥離痕や光沢など使用痕が認められる。詳細については今年度刊行の報告書を参照頂きたい（富山市教委 2004）。

2. ナイフ形石器の位置づけについて

本資料については、形態からみると茂呂系ナイフ形石器の範疇に含め得るような印象を受けるものの、北陸の茂呂系ナイフ形石器は二側縁加工による柳葉状と三角形の整形を主体とする（奥村 1986）ことから、一側縁加工の本資料とは整形のうえで差異がある。また、先に述べたように背面と腹面で剥離の方向を逆にした両極打面の剥片とみた場合、東山型ナイフ形石器との関連が注目されることになる。ただし、これも大沢野町野沢 A 遺跡（大沢野町教委 1982）や上市町眼目新遺跡（富山県 1976）など県内の東山型ナイフ形石器の整形とは異なるように思われる。また不整形な縦長剥片を素材とする点において、福光町人母シモヤマ遺跡にみる小形ナイフ形石器との関連も考えられそうである。

本資料はこのように既出の石器群のなかでは捉えにくい特異なものであり、素直に系統や時期を決めがたい。筆者の勉強不足のため十分な検討が及んでいないということもあるかと思う。ここに資料の紹介を果たすことで、皆様からの御教示を得ることができれば幸いである。本稿作成にあたり麻柄一志氏、西井龍儀氏から御教示を受けた。記して御礼申し上げます。

参考文献

- 富山県 1976『富山県史』通史編 原始・古代 1
 大沢野町教育委員会 1982『野沢遺跡 A 地点発掘調査報告書』
 奥村吉信 1986「北陸にみる茂呂系石器群の性格」『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会
 富山市教育委員会 2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』